

北海道から日露関係を動かす

岩下 明裕

安倍政権が誕生して以来、北方領土問題を念頭に日露関係への期待が高まっていた。だが昨年ウクライナ危機により、我が国も欧米の対ロシア制裁にある程度、同調せざるをくなり、関係は膠着した。世界で孤立したロシアと中国や韓国・隣国との関係改善がままならない日本、西国ともなれない関係をつくりたいと思っているのだが。

危機以後、明確になったのは、ロシアは死活的利益を関心しはるかに現状の変更も辞さないという点だ。他方でプーチン大統領は自国の利益になる友人たち、ロシアのクリミア併合を事実上、支持した中国やインドなどの関係を本当に大事にする。だが日米同盟の縛りは日本がプーチンの「親友」になることを許さない。橋本、小淵、森といった政権下で領土交渉が進展していたのは、米国がロシアを「パートナー」とみなしていたからであり、日本外交が自由に動けたからだ。

記念日を生かせ

ところで安倍政権には北方領土解決にむけた具体的な案はないといわれる。政府は「四島返還」から引く気はなく、長期戦のかままだ。その一方で中国の脅威に対処すべく、

交戦110周年 合同慰霊祭主導を



日露戦争の戦死者名が刻まれた対馬の慰霊碑(筆者撮影)

ロシアをなんとか日米同盟の側に引き寄せようとしてきた。残念ながら、ウクライナ危機、機運は途絶え、ロシアでの中国人気は高まる一方だ。全露世経調査センターが昨年11月にリリースした調査結果では、2014年の中国の評価は5年前より著しく高まっている。今の中国を「戦略・経済的パートナー」友好国、「同盟国」とみなす割合は、60%から85%に増加(ライバル)とみなすものは24%から8%に、「敵」とするものは4%から1%に減った。21世紀全体を通じて展望に至っては47%から79%(ライバル)、「敵」は29%から10%に激変した(ロシア政策動向) 2014年11月30日(日)。ロシアが中国を

心中で怖がっているといった思い込みは過去のものとなりつつある。

では日露関係を維持するためどうしたらいいのだろうか。プーチン訪日の実現ひとつと北方領土問題で成果を得るのも難しい。前者については、2カ国間のみの記念日を利用して、日清、日露、先の大戦などの影が想起され、隣国との関係が厳しい。

フェリーを支援

私は日露戦争(1904~05年)110周年の節目を高国で祈念したらと考える。昨年のバルタイ会議で直接、プーチン大統領に提案したが、だが、彼を対馬に呼び合同慰霊祭を行う。一般に日本海(対馬沖)海戦はロシアの屈辱のように思われたが、

彼らにとつての対馬は感慨深い場所だ。漂着したロシア兵を救出・看護した地元の記憶、戦死者5千名のロシア名が刻まれた慰霊碑とともに、日露の国旗が掲げられている。慰霊のための訪日に外国が口をはさむ筋合いはない。西国はかつての戦争の記憶を、地元の交流によって乗り越えたとアピールする。これは先の大戦の結果を未来志向で乗り越えるという日露の意思表明と重なる。

成果については北海道のイニシアティブが鍵となる。未来志向で日露関係をつくること、この20年で培った交流の成果を止めてはならない。今後の通航員通しが立たない稚内とコルサコフのフェリーを西国友好のプロジェクトとして国が全面支援する。さらにビザ免除の導入だ。実際、韓国とロシアは昨年からビザ免除協定を結び、パスポートだけで自由に訪問が可能となった。日露でできないはずがない。まずは北海道限定の導入でもよい。我が国には、沖縄訪問などを条件に、中国人旅行者にビザ緩和措置をとった経験もある。例えば、フェリーを使う日露双方の旅行者は1週間以内ならばビザがなくてもよいとする。北海道から日露関係全体をリードし、稚内や道北がゲートウェイとして生き残る。私たちの知恵の見せ所である。

(いわした・あきひろ『北大スラブ・ユーラシア研究センター教授』)